

東京六大学野球衰退の原因と今後の発展の可能性

Causes of the declining of Tokyo Big6 baseball league and the possibility of its development

1K03B038-8 岡田雅子

指導教員 主査 木村和彦 先生 副査 葛西順一 先生

<緒言>

東京六大学野球リーグ戦は1925（大正14）年にスタートし、今年2006年秋で155シーズンを迎えた。

アメリカにおけるベースボールが底辺の草野球から生まれて上昇し、プロに発展していったのに対し、日本の野球は学生野球から発展した。

日本の野球の中心となったのが東京六大学リーグ戦である。東京六大学によって発展し今日の基盤をつくったと言っても過言ではない。学生野球において最も注目が集まる東京六大学野球。しかし最近の人気低迷は否定できない。

長嶋茂雄が立教大学で活躍していた時代までは東京六大学野球のほうがプロ野球より観衆を集めていた。早慶戦はもちろん観客は超満員。早明戦、法立戦なども3、4万人は観客が入っていた。

年々学生の応援も少なくなり、一般の人気も低下して7、8千人が平均的な観客数であり、良いカードでやっと1万人を超えるような状態である。観客席が空いているのは当然のことで、早慶戦でさえスタンドに空席が目立つという現状である。なぜ、このようになってしまったのだろう。人々にとって東京六大学野球がどのようなもの変わったのか。

本研究では、第一に、東京六大学野球の発展過程の歴史的な分析によって、衰退の原因を探る。次に、現在の日本の大学における人気スポーツ、アメリカの大学メジャースポーツと比較しながら、近年その衰退の原因となってきた要因が、変化してきていることを実証し、今後の東京六大学野球の発展に貢献する可能性を明らかにすることを目的とする。

<研究方法>

本研究では、第一に、文献講読と東京六大学野球に関するホームページなどからの情報を引用し、東京六大学野球が人気だった頃の歴史的な分析を行う。（①早慶戦の時代、②長嶋茂雄の時代、③江川卓の時代）また衰退の原因を、①メディアへの露出の変化、②スター選手の不在、③若い女性ファンの減少、④娯楽の分散、⑤母校愛の希薄化、⑥大学野球全体における東京六大学野球のレベル、という視点から検討していく。

次に、現在の日本の大学における人気スポーツ、プロ野球と高校野球、そしてアメリカの大学におけるメジャースポーツと比較しながら、衰退の原因が、近年変化してきていることを、報道やホームページ上の情報によって実証し、そのことが今後の東京六大学野球の発展に貢献する可能性を明らかにする。

<結果と考察>

東京六大学野球は時代とともにメディアへの露出が低下し、またスター選手が高卒でプロ野球にいつってしまう傾向が強いこと。東京六大学以外の実力のあるリーグや、全国各地の新興実力校に分散しているため、スター選手が不在であること。その為スター選手目当ての若い女性ファンが試合を見に来ないこと。また、野球だけが学生の娯楽であった時代とは変わって、価値観が多様化し、様々な時代の背景とともに東京六大学野球が衰退してきた事が明らかになった。

大学野球と人気スポーツとでは実力、またメディアの取り上げ方の違いが明らかになった。またプロ野球・高校野球の比較においてもメディアを通して作り上げられる「ドラマ性」の影響が大きい。それと比較し大学野球のメディア露出度は極めて低い。そしてアメリカスポーツとメディアとの強力な関係も明らかになった。

今後、日本テレビ第二、日本テレビG+、そして地上波放送における3つのコンテンツがプラスされ、今後ファンを拡大させていくであろう。また東京六大学の野球部の選手たちも自分達を取り上げられて、注目されていることを励みにして、今後一層実力を伸ばしていつくれるだろう。

そして来年2007年は甲子園優勝投手である斎藤選手が早稲田大学に入学してくる。他の5大学の選手たちも「打倒早稲田」で立ち向かってくるであろう。そして斎藤選手目当ての若い女性ファンのみならず、中年や、男性ファンも多く明治神宮野球場に詰め掛けることも予想される。

学生は確実に大学スポーツ、大学野球から離れており、また母校への愛校心も薄くなっている。メディアに取り上げられたから話題になるのではなく、そして、過去の栄光や伝統にあぐらをかくのではなく、もっともっと東京六大学野球自身から様々な発信をしていくべきだという結論に至った。